

■プレゼンテーション 7■

僕の対話型授業は何だかうまくいっていない気がする

キーワード：哲学対話、アクティブラーニング、倫理、教育困難校、失敗

萩原 拓也

高等学校倫理の授業における哲学対話型授業の実践について報告をする。

本実践報告の特徴は、それがいわゆる教育困難校における事例である点である。

高等学校における哲学対話の実践は、土屋陽介氏の開智高等学校における実践や、神戸和佳子氏の東洋大学京北高等学校における実践が、昨年の哲学プラクティス連絡会で報告された。おそらく報告にあがらない様々なステージで、このような取組がなされていることだろう。そのような取組は、アクティブラーニングの普及推進を進めようとする教育界の動きを鑑みたとき、生徒の主体性を引き出す方法のひとつとして、多くの教示をもたらしてくれる。

だが一方で、これらの報告事例には偏りもある。まず、カリキュラム全体における哲学対話の位置付けである。開智高等学校や東洋大学京北高等学校では、それ教科・科目上の位置付けは異なるにせよ、哲学対話を学校全体の教育活動の中でも特別な取組として位置付けている。大学の研究者による指導や、外部イベントとの連携など、単に一教科・科目の中で実践されているのではなく、学校における教育活動の基礎をなす位置付けが、哲学対話に与えられているような印象を受ける。

また、学力水準にも偏りがあるように思われる。先述の高等学校は偏差値 60 に迫るか、それを超える水準にある（もちろんこの場合、偏差値で学力水準を図ることが正当な論証となるかは議論の余地がある）。大学合格実績を見ると、東京都内の私立大学や首都圏の国公立大学の名前が見られ、学校や生徒や保護者の、学力に関する意識の高さが伺える。

これらの特殊性ゆえ、哲学対話はある特殊な環境においてのみ実践可能である、という誤解がもし生ずるのであれば、それは不幸なことである。そして、もしそのような誤解が生ずるとすれば、それは特殊な環境ではないところで哲学対話の授業をやりながら、それを特に公表せずに黙っている側には、少なくとも責任がある。

さて、本発表の内容となる授業が実践されている千葉県立泉高等学校は、偏差値は 40 を下回り、入試科目から社会科が外され、大学に合格するとすればそれはほぼ指定校推薦であり、転退学という進路選択者数が大学進学者数に迫ることもあるという、これはこれで特殊な偏りのある学校である。だが、このようなありふれた環境で、地方公立高校の一介の教諭が、教科指導の中でいかに哲学対話に取り組み、いかなる点で失敗しているのかを報告しておくことは、哲学教育の従事者に 1 つのテストケースを提供することが出来るという意味では、一定の意義があるように思われる。以上の趣旨から、本発表では、高等学校倫理の授業における哲学対話型授業の実践について報告をする。

（はぎわら・たくや）1983 年生まれ。群馬県前橋市出身。千葉大学教育学部大学院 教育学研究科修了。大学院生時代より県内の公立高校で非常勤または講師として勤務する。初任で県内有数の進学校に配属され、異動で千葉市内随一の底辺校に配属される。これを機に、教科書中心から生徒の思考と対話中心へと、授業内容のシフトを試みている。